

H24-D1-1 深度89.91~89.95m 最新活動面の走向・傾斜 (No.22) を再観察結果に基づき変更、それに伴い条線方向 (No.23) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合

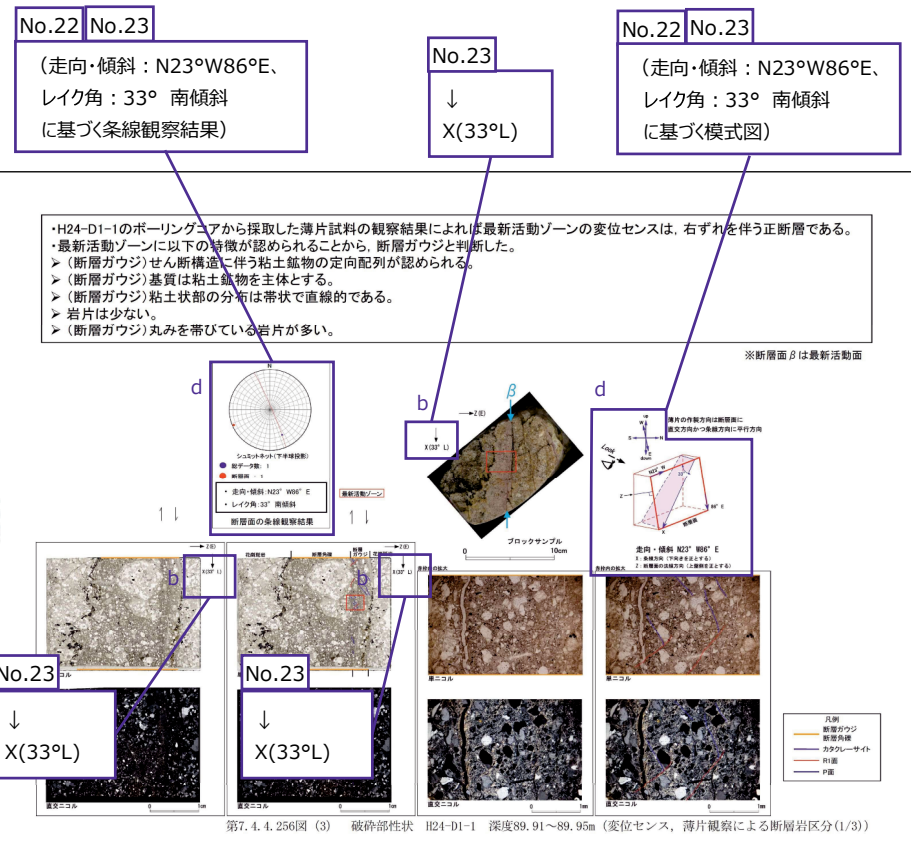
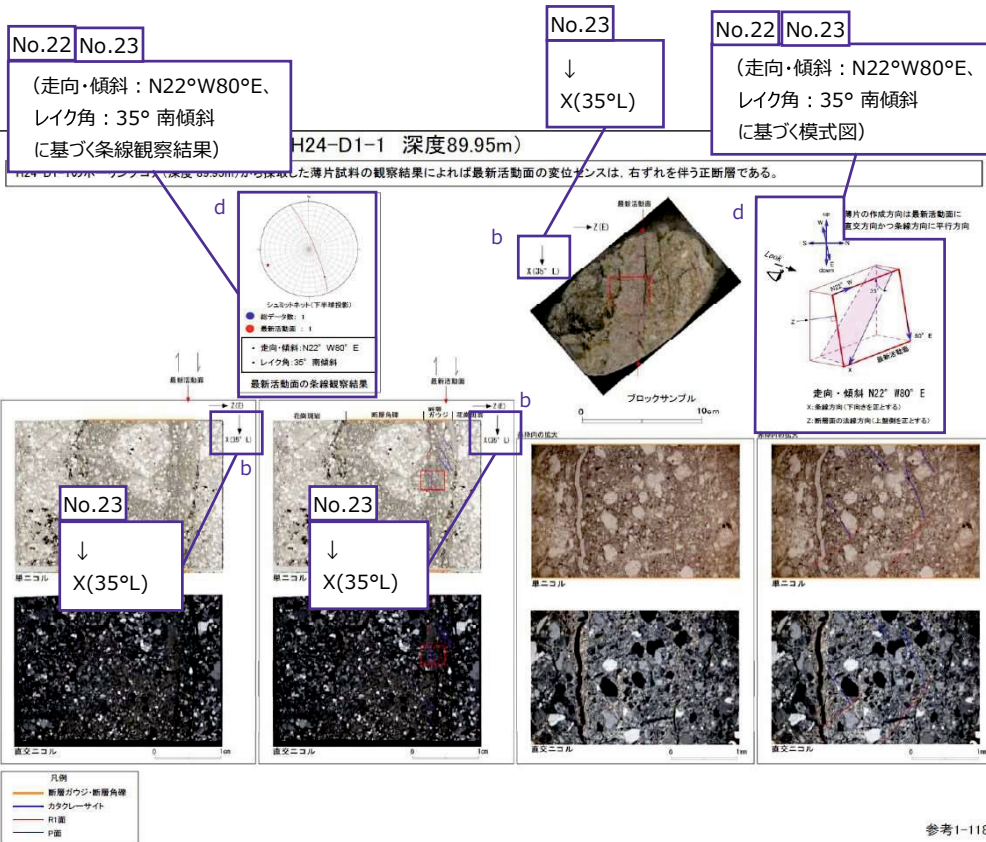
机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料1 薄片観察結果

参考1-118頁

第833回審査会合 机上配布資料1に追記(青太枠)

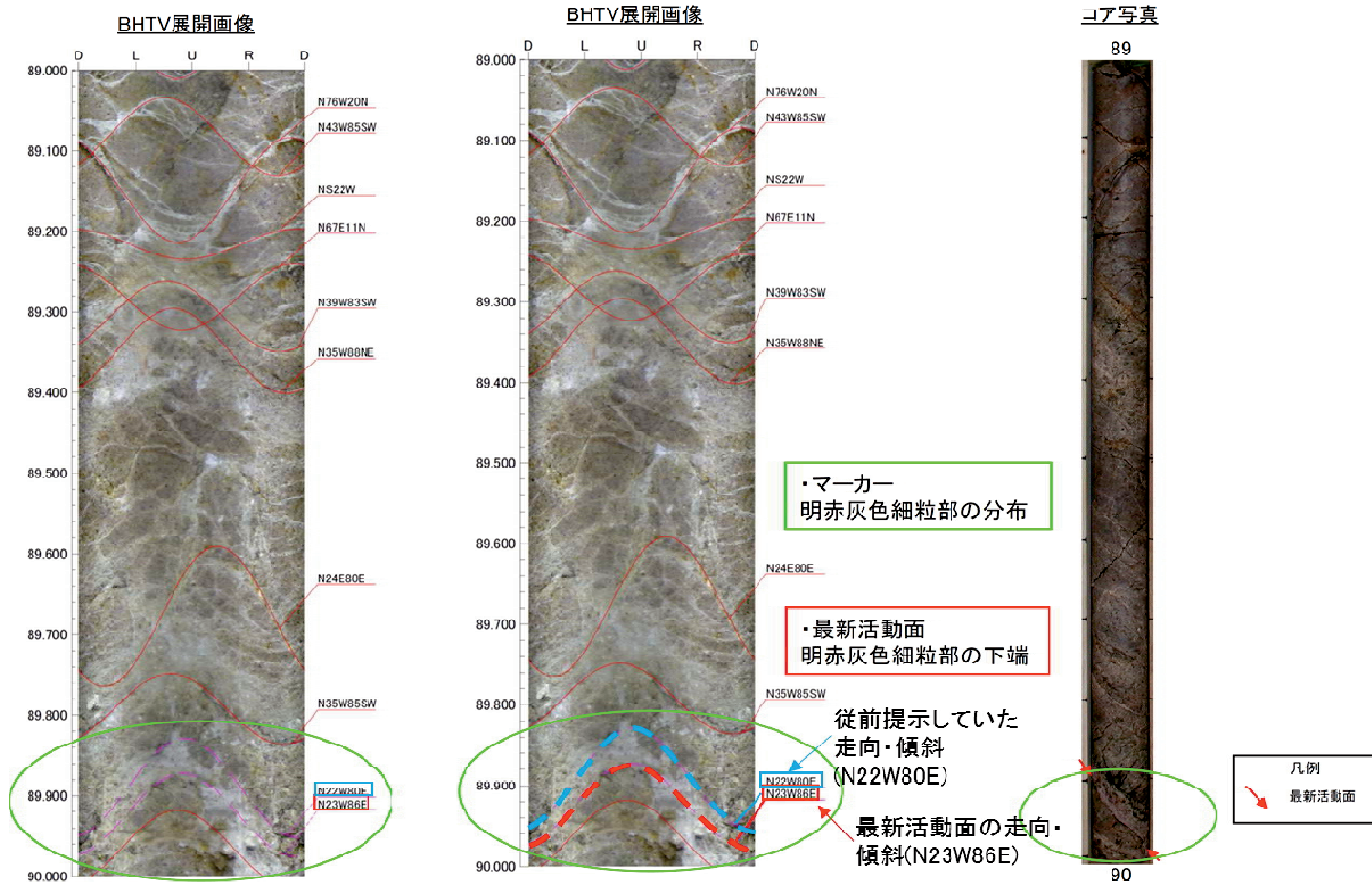


H24-D1-1 深度89.91~89.95m 最新活動面の走向・傾斜 (No.22) を再観察結果に基づき変更

- ・ 従前提示していたデータでは、性状一覧表にN22W80Eと記載していたが、BHTV展開画像からの走向・傾斜を読み誤っていたことから以下のとおり走向・傾斜をN22W80E (明赤灰色細粒部の上端) からN23W86E (明赤灰色細粒部の下端) に変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H24-D1-1 深度89.91~89.95m)

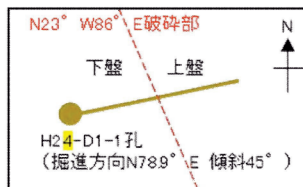
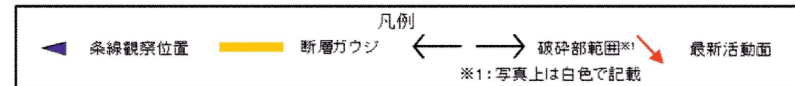
- ・ H24-D1-1 深度89.91~89.95mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はN23° W86° Eである。



H24-D1-1 深度89.91~89.95m 最新活動面の走向・傾斜 (No.22) の変更に伴い、条線方向 (No.23) を変更

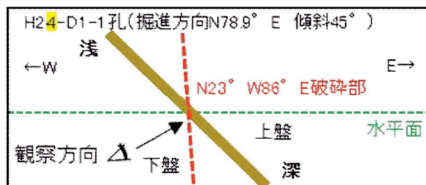
- H24-D1-1孔 深度89.95mの断層面の走向・傾斜はN23°W86°Eであり、条線観察は下盤側から実施している。

コア写真



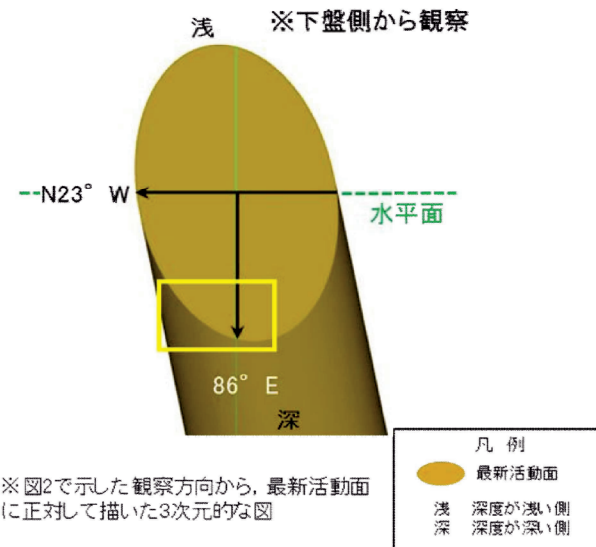
・ボーリングは掘進方向N78.9° E、傾斜45° で掘削している。
 ・破碎部の走向・傾斜はN23° W86° Eであり、ボーリングと破碎部の平面的な位置関係は左図のようになる。
 ・破碎部は東傾斜であることから、西側が下盤、東側が上盤となる。

図1 H24-D1-1孔位置平面図(模式図)



・ボーリング(掘進方向N78.9° E、傾斜45°)と破碎部(走向・傾斜N23° W86° E)をボーリング孔沿いの断面図で示すと左図のようになる。
 ・ボーリング孔の浅い側が下盤、深い側が上盤となる。

図2 H24-D1-1孔を通る断面図(模式図)



※図2で示した観察方向から、最新活動面に正対して描いた3次元的な図

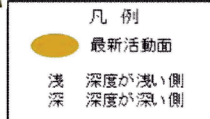
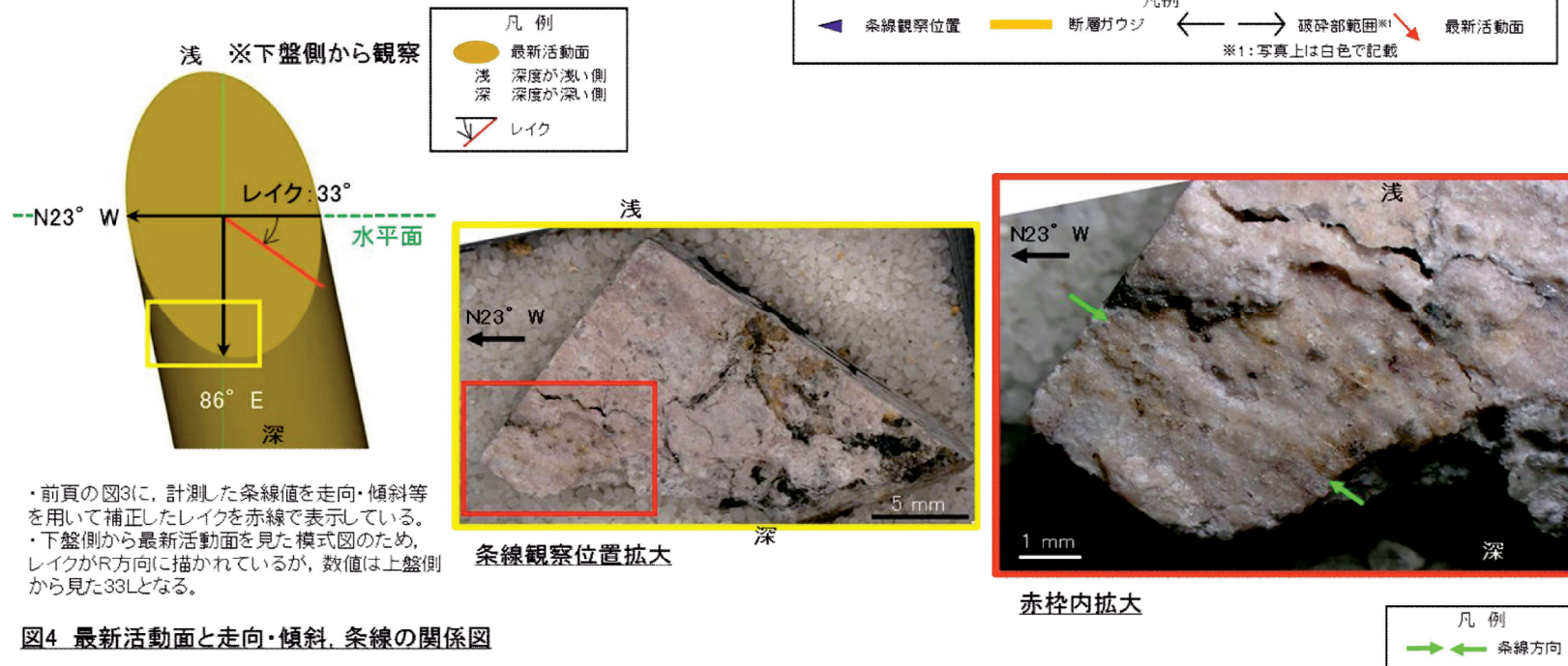


図3 最新活動面と走向・傾斜の関係図

H24-D1-1 深度89.91~89.95m 最新活動面の走向・傾斜 (No.22) の変更に伴い、条線方向 (No.23) を変更

- H24-D1-1孔 深度89.95mの断層面の走向・傾斜はN23°W86°Eであり、33Lの条線が認められる。

コア写真



・前頁の図3に、計測した条線値を走向・傾斜等を用いて補正したレイクを赤線で表示している。
 ・下盤側から最新活動面を見た模式図のため、レイクがR方向に描かれているが、数値は上盤側から見た33Lとなる。

図4 最新活動面と走向・傾斜、条線の関係図

H24-D1-1 深度89.91~89.95m 最新活動面の走向・傾斜 (No.22) の変更に伴い、条線方向 (No.23) を変更

- 条線位置が最新活動面であることを残試料を用いて確認した。

コア写真



凡例
 ← → 破砕部範囲※
 ※:写真上は白色で記載
 最新活動面

研磨片写真(コア向き)



0 5 cm

凡例
 ▲ 試料切断方向

条線観察位置



0 5 cm

凡例
 ▲ 条線観察位置

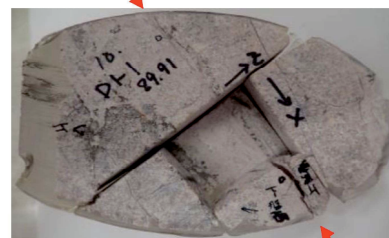
研磨片作製位置



青枠部拡大
 0 5 cm

凡例
 ▲ 最新活動面

試料切断面



0 5 cm

凡例
 ▲ 最新活動面

条線観察位置拡大



黄枠部拡大
 5 mm

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・断層ガウジの幅の変更 (No.25)

【理由】作業時に正しい情報が反映されていなかった。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

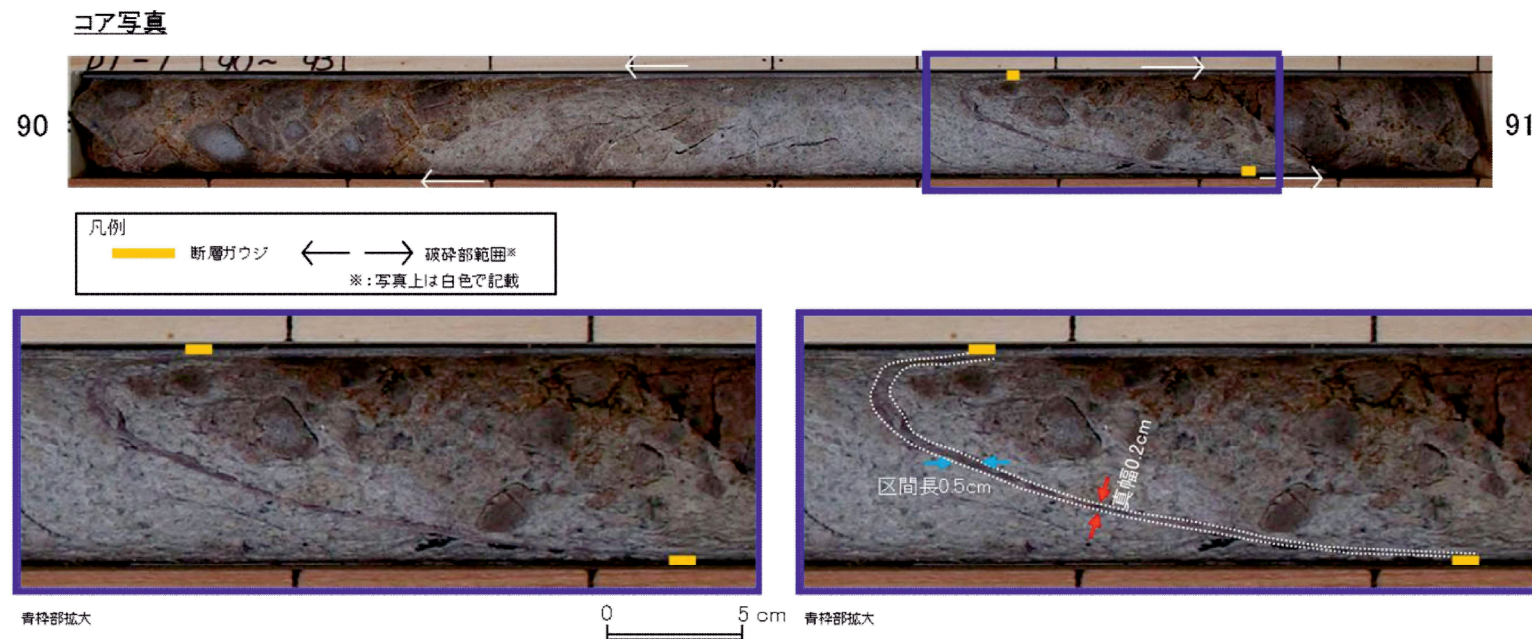
a 断層ガウジの幅の変更 (No.25)

H24-D1-1 深度90.26~90.84m 断層ガウジの幅 (No.25) を再観察結果に基づき変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に断層ガウジの幅を0.5cmと記載していたが、以下のことから、0.2cmが正しい値であるため、0.5cmから0.2cmに変更した。
- コアの再観察の結果、断層ガウジの幅は0.2cmであった。
- コア観察カードには粘土の幅2mmの記載があり、従前提示していたデータである0.5cmは断層ガウジの区間長を真幅と誤って記載していたと推定される。

断層ガウジ・断層角礫の幅算出資料 (H24-D1-1 深度90.26~90.84m)

・実測した断層ガウジの幅は0.2cmである。



凡例
 ⇄ : 従前の断層ガウジ幅
 ⇄ : 変更後の断層ガウジ幅

該当箇所のコア観察カード

90.66m : Hc-1 (主せん断面)
 157mm幅2mm 直径約25mmに連続した、赤灰色(2.5R/1)E
 呈する、軟弱な粘土 幅の記載

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・薄片試料が断層面に直交方向に作製されておらず、薄片試料を再作製した。(No.26)

【理由】薄片試料の切断方向間違い。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 薄片試料再作製による試料写真見直し (No.26)